

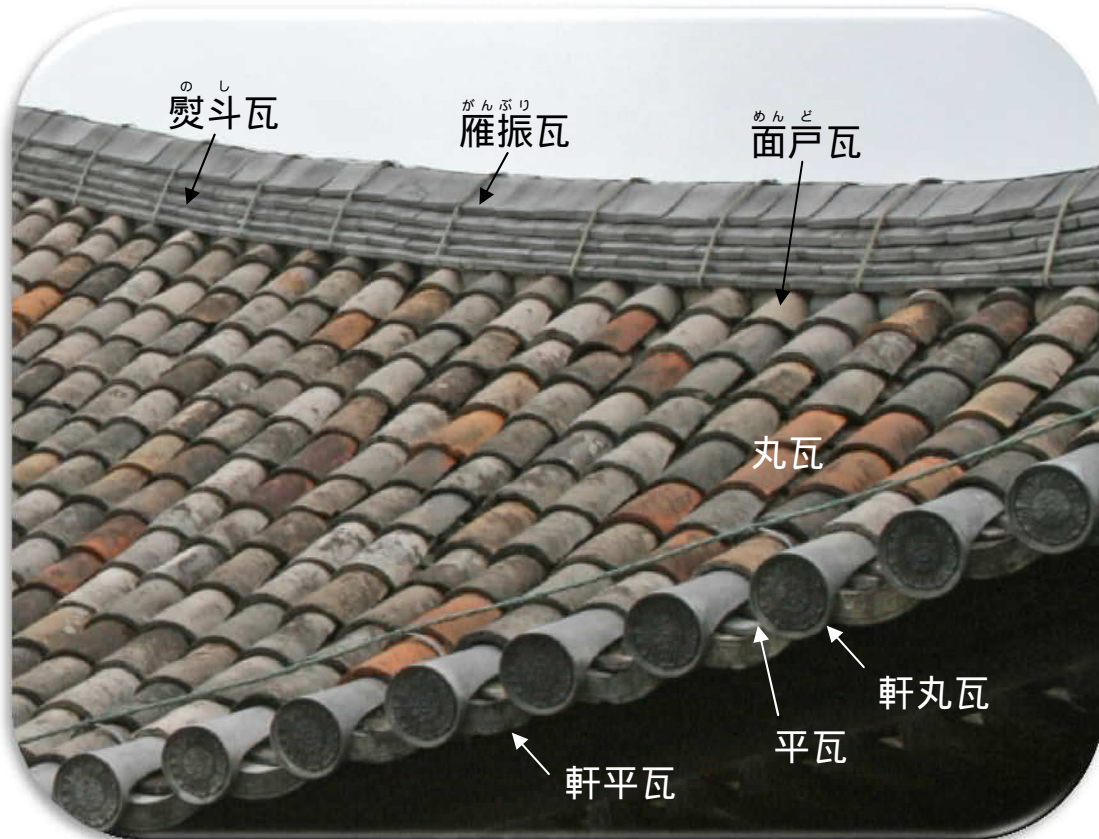
「古代の瓦つくり～下寺尾廃寺はどうやってつくられたの?～」

公益財団法人かながわ考古学財団 高橋 香



はじめに

瓦にはどんな種類があるのでしょうか?



元興寺・極楽坊西面の屋根

鴟尾の位置に私がくる事も
あるのじゃ。
大棟の四隅にはりついてにらみ
きかせているのだぞよ!



下寺尾出土復元鬼瓦





1：瓦はどうやってつくられたのでしょうか？

瓦はいつから作られるようになったのか？

瓦づくりの技術が伝わったのは・・・

・『日本書紀』より

崇峻元（588）年 百濟より仏舎利・法師とともに 寺工(てらたくみ)2名、鑪盤(ろばん)博士1名、瓦博士4名、画工1名、が渡来

・『元興寺(がんごうじ)伽藍(がらん)縁起(えんぎ)』より

用明2（587）年 百濟より法師、造寺工の派遣を依頼、翌年6人の僧と4人の工人が金堂の本様(模型)とともに渡来

飛鳥寺（法興寺）の創建！！

平瓦

桶巻き作り：桶型の成形台に粘土板や粘土紐を巻きつけて粘土円筒をつくり、それを四分割ないしは三分割するもので、大陸よりつたわる技法です。

《桶巻き作りの特徴》

粘土紐か粘土板か？

桶縫じ痕跡

分割凸帯、分割截線・截面の有無

模骨痕・杵板痕跡・側板痕跡・小札痕

どれも同じ現象のことです。

一枚作り：奈良山瓦窯跡群の一つである梅谷瓦窯、瀬後谷瓦窯で製作された。当初は平城宮造営開始とともに早急に瓦が必要になった為、あみだされた新しい技術とされていましたが、近年の研究結果により平城 期(708～721)では桶巻きが優勢で、 期(721～745)に主流になる。梅谷瓦窯では、平城 期初頭に導入されたと考えられています。

和銅年間～養老年間は瓦作りの過渡期でもあり、一般的に国分寺造営とともに地方へ波及したと考えられています。

《一枚作りの特徴》

凹面の布端痕跡

側面の調整、凸型台の痕跡

凸面の布凸圧技法

側面の糸きり痕跡 など



桶巻き作りの桶杵



一枚作りの成形台

丸瓦

無段式むようしき（行基葺きともいう）

粘土円筒を半分にした丸瓦。粘土板でつくられ たものと粘土紐でつくられたものがある。凹面側に模骨痕跡がみられるものもあり、細い桢板幅のものを「竹状模骨痕」という。

有段式

狭端面側に「玉縁たまぶち」とよばれる段差がある丸瓦。

➡ では、実際にやってみましょう！！



丸瓦の模骨

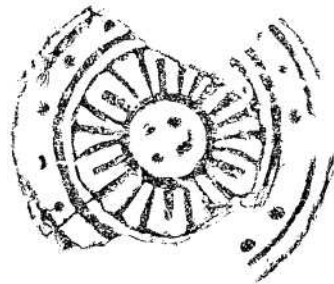


2：下寺尾廃寺の瓦はどんなものがあるのでしょうか？

今までみつかっているのは軒丸瓦が2種、鬼瓦1種、平瓦2種、丸瓦が2種確認されています。お寺の時期はざっくりいって3時期が想定されていますが、最初に使われたのは平瓦と丸瓦しかわかりません。

下寺尾廃寺で最初に使われたと考えられる軒丸瓦は、単弁六弁蓮華文軒丸瓦です。この瓦は間弁が一部欠損しているところが特徴的な瓦なのですが、同じ文様の瓦が海老名市の相模国分僧寺や尼寺、平塚市の相模国府域から確認されているのです。

瓦の顔（瓦当面）は、だいたい木製版で作られますが、何度も使っているとだんだん表面が割れてきます。その隙間に粘土が入り込んで、これが転写されて瓦当面にうつしだされるのが「範傷はんきず」と呼ばれる痕跡になります。よくよく瓦の顔をみると、こうした小さな傷をいくつもみつける事ができます。



単弁六弁蓮華文軒丸瓦

この瓦には範傷がいくつも確認されるのですが、相模国分寺にはない傷が、下寺尾廃寺から出土している瓦にみられたり、下寺尾廃寺から出土した瓦にはみられない傷が国府域から出土した瓦にみられたりするのです、つくられた順番を追うことができます。

けっこう使いこんだものはこんな感じで「範傷」がのこるのだぞよ！！



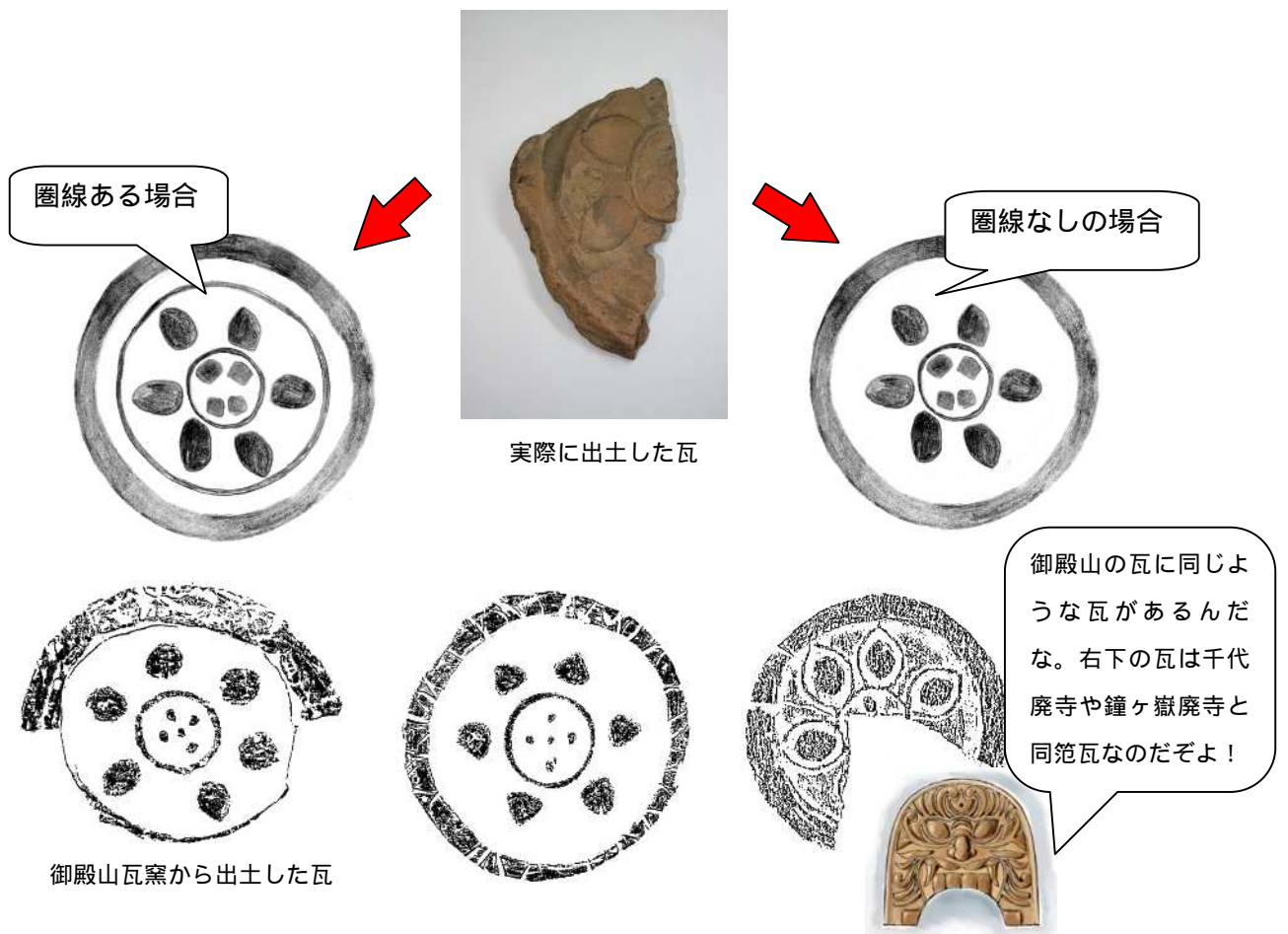
次に確認されている軒丸瓦は、ちょっと型崩れしたような文様意匠の軒瓦です。素弁とよばれる蓮弁で、中房は圏線で区画された中に大ぶりの蓮子を二つ配置しています。お世辞にも「上手」といえるような瓦ではないような気がしますが、当時の瓦工人たちは一生懸命作ったのでしょう。

この瓦もよくみると、色々な特徴をみる事ができます。

例えば、瓦当裏面は繁雑にナデ調整をしています。部分的に縄叩きをしている痕跡がみられます。観察をしてみると瓦当面の側面にも縄叩きをしている部分がありますが、これと同じ技法をしている瓦が武蔵国分僧寺の再建瓦から見る事ができます。この縄叩きをしている瓦を作っている瓦窯が、東金子瓦窯でつくった瓦である事がわかっています。

また、この瓦は作り方がとてもわかりやすい資料となっています。丸瓦の広端面を瓦当の外縁の部分にあてはめてその下に瓦当面をつけています。丸瓦との接合部分の粘土がとても少ないので、瓦を作るには作りやすかったのかもかもしれませんが、接合している部分がとても少ない為、剥離した資料が多く見られます。この作り方は「はめこみ技法」と呼ばれる技法で、御殿山瓦窯で作られた瓦にも同じ技法で作られた瓦がみられます。

武蔵国分寺の瓦を作っていた瓦工人は、東金子瓦窯から御殿山瓦窯へ移動してつくっている事等色々な資料からわかっています。同じような技法が確認される事から、武蔵国分寺の瓦を作っていた瓦工人に修業にっていた瓦工人が、下寺尾廃寺の瓦を作っていたのかもかもしれませんね。

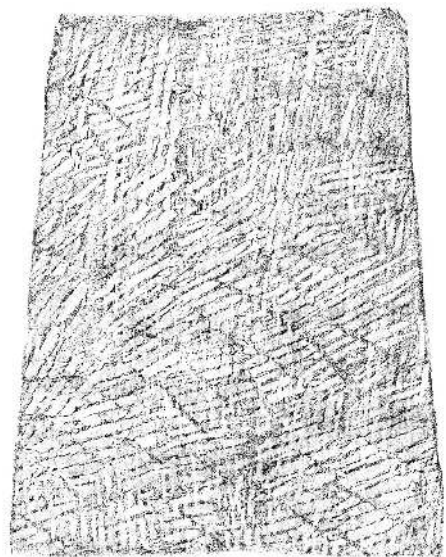


平瓦は桶巻つくりと一枚作りの瓦がみられますが、ほとんどは桶巻作りの瓦です。凸面の調整によって大きく4種類にわけることができます。

一つは相模の中で一番古いといわれている「下寺尾型」の瓦です。桶巻作りで作られているもので、凹面・凸面ともに、丁寧にヘラナデ調整をしている瓦です。凹面の布目がほとんど残らないようにとても綺麗にナデ消しています。この瓦は宗元寺や、鎌倉郡衛の近くにある千葉地東遺跡からも確認することができます。下寺尾廃寺には古い軒丸瓦がみられず、顔がないですお寺ですが、一時期相模で一番古いお寺と考えられていた根拠となっていたのはこの瓦が出土していたからです。

次に下寺尾型と同じような胎土で確認されている瓦として桶巻作りの瓦が多くみることができます。下寺尾型ほど丁寧ではありませんが、一次調整で縄叩きしたものをナデ調整によって消している瓦で、凹面側には杵板痕跡が明瞭に観察できます。この種類の瓦が下寺尾廃寺で一番多く出土している瓦です。また、正方形の形に縄叩きの原体が想定される平瓦がいくつかみられ、少し特徴的なこの瓦は三浦半島の石井瓦窯にみる事ができます。かつて小字名で「法塔」という地区から採集されていたので「法塔瓦窯」として想定されていましたが、現在は石井瓦窯のエリアと一緒に考えてもよいかもしれないといわれています。

一枚作りの瓦は、縄叩きの瓦と変形格子の2種が確認されています。縄叩きの瓦は、乗越瓦窯産と考えられる瓦の他、凹面側に「指ナデ文字瓦」という布目を指でナデた瓦や、「模骨文字」といった凹面側に文字が浮き掘りになった瓦がみられます。前者は町田市にある瓦尾根瓦窯から、後者は八王子市にある御殿山瓦窯産で生産が確認されています。縄叩き以外には、右にあげたような変形格子瓦がありますが、他の遺跡でみる事ができません。似たような瓦が相模国府域で確認されていますが、特徴的な叩き具でありながら同じものを見つける事ができません。この瓦は一体どこでつくられたのでしょうか。実はこの瓦にも大きなヒントが隠されていたのです！！



変形格子平瓦



3：下寺尾廃寺の瓦は、どんな時期に葺かれていたのでしょうか？ ~展望と課題~

下寺尾廃寺から出土した瓦は、おおよそ4つの時期にわけることができます。

- ・現段階で軒瓦が確認されていないけれど、下寺尾型の平瓦を主とする時期
- ・一枚作りの平瓦が採用される時期 = 乗越瓦窯産の平瓦を使用する時期
- ・国分寺再建瓦を使用する時期 = 瓦尾根瓦窯産の平瓦を使用する時期
- ・素弁蓮華文軒丸瓦を使用する時期 = 御殿山瓦窯産の平瓦を使用する時期

現段階での下寺尾廃寺の変遷は、報告書によると以下のようにまとめられています。

寺院造営期（7世紀後半） 寺院創建期（8世紀前半頃） 寺院再建期（8世紀後半頃）

寺院改修期（9世紀第2四半期～中葉） 寺院廃絶期（9世紀後半） 仏堂期（10世紀～11世紀代）となっていますが、上手くあてはまるかちょっとみてみましょう。

平瓦の桶巻作りと一枚作りの比率は、お寺の中心部分では3次調査分ですが伽藍域では9：1、周辺の集落域では6：4という結果となり、ほとんどが桶巻作りの平瓦である事がわかります。特に、集落域から確認されている一枚作りの瓦は、カマドの袖の芯材として使用されている事が多く、不要になったからカマドに使用したのか未使用の段階で使用したのかは、定かではありません。

瓦を使用した年代を、ある程度わかる範囲から確認していきましょう。

乗越瓦窯の瓦を使用する時期は、乗越瓦窯の時期が8世紀第2四半期という年代があたえられていますので、この時期から後、という年代があてはめられるでしょう。国分寺再建瓦を使用する時期は、下寺尾廃寺に使われる前に国分僧寺・尼寺で使用されたと想定されている事から、ここの年代が鍵になり、再建の時期を9世紀中頃としている事からもしくはほぼ同じ時期として想定されるならば、この時期は9世紀第2四半期頃と想定されます。素弁蓮華文軒丸瓦については、オリジナルの瓦が御殿山瓦窯で生産された瓦である事から、この瓦窯の年代を定点に考えてよいかもしれません。御殿山瓦窯の生産がG5窯式期と呼ばれる時期に生産が多い事を考えると、その時期に該当すると思います。

ただ、この瓦は面白い瓦でもあります。『小出川河川改修関連遺跡群』の調査で、胎土分析を行いました。その結果、偶然にもこの瓦と同じ胎土の瓦を分析にだしていました。粘土紐桶巻き作りでつくられ、瓦当と丸瓦の接合部の補充粘土が少ないという特徴をもっています。同様な状況が御殿山瓦窯の瓦にもみられ、先にもでてきました「はめ込み技法」として周知されています。御殿山瓦窯の製品の特徴とてもよく似ている事から、同じように瓦の時期をあてこむ事ができるでしょう。ところが、胎土分析をおこなった結果、三浦半島を起源とする鋳物が確認されている事から、三浦半島で作られた瓦の可能性を指摘する結果がでていたのです。こうした状況は、御殿山で瓦生産をしていた瓦工人在三浦半島にあるとある瓦窯へ移動して瓦作りをしていた可能性が考えられるかもしれません。

このようにたった1片の瓦からはたくさんの情報を読み取る事ができます。瓦は、単なる瓦礫ではありません。一つ一つに、当時の瓦の作った人々のメッセージがあらわれている、それを読み取って歴史を復元して未来につなげていく事が、後世に残された私たちの仕事なのだと思います。

この瓦、横に縦方向に線がみえるのがわかるかな。これは、粘土を紐状にしたものを円筒にぐるぐるまきつけて筒状にしてつくったのだぞよ。

